

マッセ・市民セミナー  
(NPO法人ちゃいるどネット大阪共催)

**「いま、保育でたいせつなこと」**

開催日：平成26年6月6日（金）

会 場：大阪府社会福社会館 401会議室



## 「いま、保育でたいせつなこと」

赤西 雅之 氏  
(社会福祉法人子どもの家福祉会 理事長)

### 1. あいさつできない中学生

私は去年まで大学にいましたが、このままではまずいと思って一度引きました。そして、それまでは断るようにしていた各地での講演会を受けるようにして、昨年1年間は全国を諸国漫遊させていただきました。今日のテーマは「いま、保育でたいせつなこと」ということで、なぜこのようなことが起きてきたのか、変わらぬものは何か、変わっていくものは何かを考えます。

今年の4月に現場に戻って痛感したのは、7年近い大学生活で体力が落ちたことと、やはり子どものことは子どもに聞けといわれるように、答えは大学の中にはなかったということです。あらためて現場の大切さを教えていただいている毎日です。

今、トライやる・ウィークという中学校2年生のソーシャルスタディをしています。トライやる・ウィークとは、20年近くになる、兵庫県がスタートしたソーシャルスタディです。はじめにガソリンスタンドや本屋、保育園など業者の方を集めて、中学生が勉強に行くオリエンテーションがあります。そこに以前、私が呼ばれたときに、校長先生から「学生たちをよろしくお願いします」と1時間に3回も言われました。なぜなら14歳の中学校2年生が、あいさつができないので、各事業所であいさつを教えてほしいということでした。PTAを中心としてあいさつ運動などを行っているはずです。「ああ、そうなのか」と思いました。

14歳の中学校2年生であいさつできないなどという、おかしな話はありません。全員が保育園や幼稚園に通っていなかったとしても、小学校に入学すると月曜日の朝礼で「おはようございます」と校長先生があいさつされ、子どもも「おはようございます」と言っていますから、14歳までに3,000回ぐらいは言っているでしょう。保育園では歌って教えることもあるので、3,000回では足り



ないでしょう。それでもあいさつができないのも、校長先生が初対面の人に3回も頭を下げるのも、どう考えてもおかしいと思います。しかし、これが現実です。なぜこんなことが起きるのでしょうか。

## 2. 変わらない保育

3,000回は教えているのに身につかず、14歳になってもあいさつを教え続けていることを、まずはおかしいと思わなければいけません。今日、子どもに何を教えたのか、昨日何を教えたのか、14歳までつながるあいさつとは一体何かを、私たちはもっと考えなければ前には進めません。

保育は変わらないと、つくづく思いました。何十年たっても相変わらず経験的に、情緒的に子どもに向き合っています。全国全てとは言いませんが、多くの都府県でそれを確認してきました。最近、「呼んでいただいて申し訳ないですが、こういう研修会、講演会は本当に保育を変える力になっていますか」と、最初に投げ掛けています。主催者は不思議そうな顔をされます。講演の後は、良いお話を聞けたとよく褒めてもらえますが、月曜日から自分の園、クラスの保育が少しでも変わっていかなければ駄目です。それで初めて良いお話を聞いたということです。しかし、実際の現場では、月曜日も相変わらず先生は子どもを追いかけて、大きな声で「もう」と言っています。保育が変わらないのは、みんな本気で変えようと思っていないからです。今日は辛口な話になるかもしれませんが、今日はさまざまな園、自治体、地域で引っ張っていく立場の方もいらっしゃいますので、そんな話をします。

今、制度変更のお話がありましたが、日本中で勉強しています。5年ほど前に保育所保育指針が改定になったときも全国で勉強しましたが、あのときの熱気はどこに行ったのでしょうか。やはり保育の現場は元に戻っています。感染症マニュアルや防災マニュアル、危機管理マニュアル、アレルギーマニュアルといったものが次々と出ていて、情報量はとても豊かになりました。また、部分解除で誤食・誤飲などの事故が多く起きたため、昨年8月に厚労省が部分解除はしないという方針を出しました。そこから全国での講習を一気に始めて、今に至っています。

こういったことがどんどん進んでいきますが、皆さんが保育室で向き合っている子どもの理解や、子どもの導き方、保育方法、カリキュラムの立て方が変



わらないのはなぜでしょう。私たち大人には責任があり、自主性のある自立した子ども、感性豊かな子どもを育てようと目標は掲げますが、保育の現場がなかなかそこに近づけません。

こういうことはもうやめたいと思います。一度あいさつを教えれば、14歳までできる子にしましょう。他に仕事はたくさんあります。意味のないことを3,000回積み重ねていっても、恐らく先生たちはむなしくなるだけです。

### 3. 先生減少の理由

先生としてのプライドを復活させられるよう、プロとして子どもに向き合っ  
て、先生としての権威とプライドをもっと持って仕事をしましょう。子どもの世話をし、親の要望を聞き、安全・安心保育を求めることに明け暮れて消耗していった先生たちが、保育現場から離れていきます。毎年、養成校は100人なり150人なり決まった人数に資格を与えて輩出しているのですが、ここ2～3年で、全国で先生の数が急に少なくなってきています。それは、待機児童が増えたからではありません。国は労働が厳しいから、給料が安いからという理由を挙げましたが、それで先生が少なくなったという実感はありません。それは30年前も同じで、それでもわれわれは頑張ってきたし、良い先生も多くいました。それはこの仕事が面白く、使命感があったからです。

毎年多くの職員が辞める法人や園では、人集めが大変だと聞いています。先生1人雇用するのに派遣業者を利用すると料金が高いので、おかげで派遣業者はとても潤っているようです。私のところは幸い辞める方が少なく、補充も少なく、まだ利用せずに頑張っています。

国が総括した理由は当たらずとも遠からずですが、本質は突いていません。3,000回のあいさつと同じで、みんな何となく分かるのですが本質には届いていません。こんなことばかり続けていても仕方ありません。確実なものをつひとつ手に入れて、子育てをしていきたいです。ですから今日は、一つ二つ確実なものが伝えられればと思っています。

### 4. 今の若い親

今回の制度変更もそうですが、ことの発端は覚えていますか。認定こども園が始まったのが平成18年で、一気に2,000か所増やすということになりました



が、その年にできたのは百数か所でした。今は400ぐらいです。これはたまたまないと、少子化対策、待機児童対策が始まりました。ところで、待機児童は大阪や神戸にも百数十人いて全国にもパラバラとはいるのですが、待機児童対策というのは主に千葉・神奈川・東京など大都会の施策です。ですから、確かに困っている所以对策を打ち出す必要はありますが、待機児童対策一辺倒で国を引っ張っていくのには無理があります。多くの府県では待機児童対策よりも人の問題に困っています。全国一律、田舎でも都会でも今の若い親に困っています。

例えば、新学期に保護者会を開くと、自分の3歳の子どもに箸の持ち方を教えてほしいと言う親がいます。3歳なので確かに箸の持ち方を練習した方がいいかもしれませんが。ただ、3歳の子どもはまだ筋肉運動ができず、指が使えず基本的に手のひらを使うつかみ箸になります。3本指の基本を押さえる手の指の形ができるまで時間がかかります。箸は道具で、長さや重さがあり、子どもの手にあうような工夫が要るので、できるだけ家と同じようなものを園でも提供した方が、整合性が高いのです。そこで、家ではどのようなものを使っているかを聞くと、「家では面倒くさいからスプーンを使っています。箸は保育園で教えてください」と言われます。とりあえず、「分かりました、では保育園で教えます」というのはよくある話です。

ある保育園では、園の前の道は交通量が増えて危ないので、すぐそばに駐車場を借りて、そこに車を置いて送り迎えをしています。ところが、面倒なのかルールを守らない人がいて、園の前に横付けして、エンジンをかけたまま子どもを降ろす人がいます。職員が朝夕門の前に立ち、停めないよう交通整理をしますが、それでもルール違反をする人がいて困ります。

30年前もそんな人はいて、停車している車の窓をコンコンとして、「ここに車を停めたら駄目ですよ。何度もお知らせを出しているでしょう。車の量も増えているし、交通量も多いですから。駐車場を借りているから、そこへ停めて送り迎えをすればいいでしょう。ここはすぐに動かしてください」と声を掛けると、「すみません。少し急いでいたのです。すぐに動かします」と恐れ入った様子で動いてくれました。

ところが今は違います。先日、同じことを言って注意すると、若い母親でしたが、ドアを開けてわざわざ降りてきて私の前に来て、「私だけではないでしょう。なぜ私に言うのですか」と怒りました。そう言われれば他にもいます。こ



ちらが「すみません」と言いました。私は事務所に戻って、「言ったけど駄目だった。怒られた」と言うと、職員に弱腰すぎると、また叱られました。こんなことも珍しくありません。

また、ある園では、週明けの夕方に電話がかかってきて、職員が「はあ、はあ」としきりにあいづちを打っているのので、どうしたのかと聞くと、苦情の電話でした。私は「代わってあげる。苦情を聞くのが好きなので」と言って電話に出ました。若い母親が「きちんと面倒をみているのか。おむつを替えてくれているのか。おむつかぶれがひどい。」と怒っています。私は、「分かりました。赤ちゃんの担当の先生にくれぐれもよく言っておきます。すみませんでした」と言いました。親は「もう。気をつけて」とガチャンと電話を切りました。これはかわいそうです。親は、おむつかぶれは気になります。私は赤ちゃんの部屋に行って「苦情の電話です。おむつかぶれがひどい、おむつを替えてくれと言っているが、きちんと見てやっているか」と聞くと、みんな無然とした顔をして、「理事長先生、あの子のおむつかぶれはいつも月曜日です」と言い返します。「アラ、アラ」という感じです。

また、自分の都合で勝手に園を休ませます。新学期になって、ようやく慣れてきて泣かずに来られるようになったと先生が喜んでいていた子がいたのですが、先日、突然「今日は休みます。私が休みだから」と、電話がかかってきました。せっかく慣れてきた子のリズムをここで壊したくないというのが、われわれの考え方です。親の都合で子どもを振り回しています。

こんな話が、全国どこでもたくさんあります。自治体の課長や園長先生、組織の長の方は、本当に今の若い親にはかなわないとか、常識がないとか、いろいろな言い方をされます。しかし、私は「今の若い親は」と突き放すことはできません。それは、そういう親御さんをつくってしまったのは私たち50～60代の大人世代に責任があるからです。

## 5. 全ては1.57ショックから

今日の講演会は、ここからがスタートです。ことの発端は、平成元年の1.57ショックです。今の子ども・子育て支援制度も認定こども園制度も、全てはこれが発端でした。1.57はその年の合計特殊出生率です。その後、下がり続けましたが、先日新聞に出ていた数字は1.4人強で少し回復しましたが、それでは



人口は増えません。2人以上でなければ、人口は横ばいにはなりません。

これがなぜショックかというと、1966年の丙午の年が1.58人だったのですが、その年よりも低いということで、これは大変だ、子どもの数が減ってしまうと。この年に国が掲げたのが、5年間のエンゼルプランでした。その後、エンゼルプランは10年になり、今の子ども・子育て支援制度につながります。このように歴史はずっとつながっています。

皆さん子どもを産んでください、働きやすく、子どもを生みやすい環境をつくろうと、保育園を増やしました。国は6,000億円ほどの予算を使ったので、その頃の施設はどれもとても立派な施設に建て替わりました。そして、民間を中心として定員を増やし、メニューも増やしました。例えば、それまではそれほど盛んでもなかった7時～19時の延長保育が、当然のようになっていきました。その少し前に、乳児保育の一般化が進みました。普通の保育園でも沐浴設備を整えて、ほふく室を造って、乳児を預かってもいいということになったのです。また、障がい児保育も進みました。それまでは障がい児を持った親御さんは、子どもを預けるところがなくて、働けなかったのですが、条件はありますが保育園で預かる動きが広がりました。その後、休日保育、病児・病後児保育などさまざまなメニューが出てきて、今に至っています。都会では20時までは当たり前になってきました。11時間開所で、それ以上が早朝・延長となりますが、そこへ補助金が付きます。

国は園を開放して預かってほしい、働きやすくしてほしい、子どもを産んでもらいましょうという方向でやりましたが、出生率は全く上がりませんでした。私は、そんなことでは産まないと思います。しかし、国は保育施設をたくさん造るという方向で進んでおり、今に至っています。

その中で、メニューを増やすだけならよかったのですが、別の問題が起こってきました。役所の窓口にも、例えば、「赤西保育園が子どもをきちんと見てくれない」という苦情が入ります。役所の担当者は「分かりました」と言い、「こういう苦情が入っていますから、対応してください」と赤西保育園に連絡します。しかし、こちらはそれは家庭の問題で、園でそこまでやるのかと聞くと、役所は「親の言うことをきちんと聞いてあげてください。親のニーズに添えてください。安心・安全を親が求めている。そのための補助金を出して、運営費を出しているのですから、聞いてあげてください」と切り返すのです。本当は



窓口において、「それは家庭の問題でしょう。園は集団保育で、ベビーシッターをやっている訳ではありませんからね。それは少し違いますよ」と親御さんを押し戻していただかなければならないのに、全て苦情だとなります。ですので、保育園は親の言うことを、そこそこ何でも聞きました。特に公立保育園はそういう時代を迎えました。

それから10年、20年たち、その頃10歳だった女の子が20歳になって、赤ちゃんを連れて保育園に来ます。この10年、20年の間に、保育園というのは言えば何でも通る、聞いてもらえると、みんな勘違いしてきました。それが今、全国でいろいろな問題を起こしています。大人世代は「今の若い親は常識がない」と言いますが、国を挙げて、予算を付けて、建物を大きくして、メニューを増やして、補助金を付けて、保育園バブルにして、言えば通るという風にしてしまった。そのツケが今きています。

「今の若い親は」に、全国で困っていますが、われわれも片棒を担いでしまったので、持っていくところがありません。若い人たちにすれば、言ったらしてもらえるのでしょ、保育園というのは上手に利用するところなのでしょうと、あっさりしています。特に今の人たちは言いたいことは言い、きちんと自己主張をします。隣の人がこうしているから、私もこうしなければ駄目だというようには考えません。主張するのは悪いことではないと思います。しかし、それには責任もあるということの自覚は足りません。

## 6. 大人世代の責任

それをどうするか。待機児童対策も、制度の変更に合わせて自分たちの道を決めていくことも大事ですが、その根底を流れている、みんなが困っている「今の若い親は」にどう向き合うのかです。これをもう一世代繰り返してしまうと、取り返しがつかなくなると心配します。今の世代で止めなければなりません。われわれ大人世代か、皆さんの世代で止めておかなければ、このままずるずるいってもうひと世代それを繰り返したときのことを、想像するのも怖いです。われわれが踏ん張って、そこを何とかしなければなりません。

何とかするといっても、いろいろなルールや、世の中の常識、道徳、倫理観を教えてもそれだけでは無理です。先ほど言いましたが、3,000回繰り返してもあいさつはできないということと同じです。では、どうすればいいか。この





ことを本気で考えましょう。保育園はとても大事な現場で、特に若い親御さんは子どもを連れて集まる場所なので、きちんとしたことを伝えるチャンスを持っています。これは大事なことで、われわれには責任があります。もう安心・安全だけを売り物にする保育園は、やめましょう。子育てにおいて、なぜかをきちんと伝えたい。どうやってそれをするのか今日はそのことをお話ししたいのです。

## 7. 子育てにノウハウはない

先週までカウンセリング月間で、私は3.5kg痩せました。朝から17時くらいまで、カウンセリングをするという状態が毎日続くので、とても大変で音を立てています。

子どもの問題を考えるのですが、先日、若い母親が、子どもをアンパンマンショーに連れて行ったら、他の子はみんな音に合わせて舞台上で踊ったり、歌ったりしているのに、自分の子どもはみんなと一緒に踊らない、歌わない。自分の子どもは人見知りが多いのだと言いました。家ではやるけれどみんなと一緒にするのはしない子を、よく人見知りとか消極的、内弁慶、引っ込み思案と言います。母親は、人見知りで消極的で、どうすればみんなと一緒にするのか、と怒っていました。

こういった子どもの問題に関して、大学の偉い人や肩書のある人がいろいろなノウハウを授けていますが、ほとんどが見事に適当な話です。このときはこう言えばいい、こう言っては駄目だ、こうすればいいということをみんな信じて、振り回されています。私はそんなことを言える立場でもないし、私が言った答えが正しかったとしても、それを持って帰ってもその人が家でできないときがあります。それぞれの家庭環境の中で親御さんができることしか、前に進みません。

講演会の後、「赤西先生、良いお話を聞けました」と言われても、園に持ち帰って明日でなければ、ノートに書かれた絵空事で意味がありません。私は大学で教えて、勉強して、いろいろなことを知っていて、いろいろなことをしています。しかし、私の知っていることがそのまま通用するかというと、ほとんど通用しません。

人の言葉は自信たっぷりに使えると言います。ご存じですか。人の言葉は迷



わず使えます。もっともらしい、立派な言葉がたくさんあります。しかし、それで澄ました顔をしては何も変わりません。自分が生み出した言葉には迷いが生じますが、相手はそれを待っているのです。手垢が付いた、どこでも聞いたような子育て論や、親としてあるべき姿などを聞いても、「分かっていますが、うちのクラスではできないから。だってAくんがいるし、Bさんがいるし、Cくんがいるし、うちのクラスがどれだけ大変か、赤西先生は知らないでしょう。そんなの無理です」と、自分のところでできなければおしまいです。また、自分のクラスの中が落ち着いていても、「そんなことを言っても、主任が意地悪で、園長に理解がなくて、うちは人間関係が悪いから無理」となると、やはり本来の仕事はできません。

「分かっていますができません」と切り捨てるような、人の言葉を自信たっぷりに使う講師は、ずるいと思います。私も以前はそうでした。言葉は何も用意されていませんので、自分で生み出すしかありません。生み出した言葉は自信がないので、本当に伝わるか、いつもドキドキします。私はいつも自信がありません。それでも、とにかく手垢のついた言葉を廃止して、この人に伝わる言葉をどうやって生み出すかを考えて向き合うのが、先週までのカウンセリング月間でした。

踊らない、歌わない、子どもの話に戻ります。その母親はとても明るい方です。子どもが喜ぶからと、機嫌よくアンパンマンショーやプリキュアショーなどを探して、ショッピングモールに連れて行っています。子どもが人見知りで、消極的で、引っ込み思案でと困っていますが、そんなふうに決めつけられると、子どもはかわいそうです。そんなことはないと言いたいのですが、どう言えば母親に分かってもらえるでしょうか。

## 8. あおられる子どもたち

私には子どもが2人いて、2人とも男の子です。女の子を育てたことがなく、女の子が家にいるというイメージが湧かないので何とも言えないのですが、あるとき、息子2人を連れて買い物に行ったら、たまたまそこでアンパンマンショーをしていました。人がたくさん集まっています。見に行くと、息子2人は歌って踊って楽しんでいました。しかし、帰りに私は、「お父さんは見なくても何も面白くなかった。君たちがなぜあんなに笑えるのかよく分からない。

あれは楽しかったのか」と、不機嫌な顔でぶつぶつ言いました。昔はそんなことはなかったのに、今は舞台や人形劇でも、ミニスカートを履いた若いお姉さんが寄ってきて、「皆さん、こんにちは」と言い、子どもは「こんにちは」と言います。お姉さんは「声が小さいわよ」と言い、子どもは大きな声で「こんにちは」と言います。なぜ子どもはこんなにあおられるのか、こんなにばかにされなければ駄目なのか、私はとても悲しいのです。あれは何をしているか、どんな意味があるのか。私は他の仕事で舞台を作るので、あの裏をよく分かっているのに、やっている意味は分かるのですが、小さな子どもに感性豊かとか、情操豊かとかいろいろうたい文句を挙げながら、一方であおってどうするのでしょうか。

人形劇の有名な劇団があります。以前、大阪方面を担当していた方から、私がある年から行かなくなったので、なぜ来なくなったかを聞かれて、私は「君のところは考え方が変わっただろう」と答えました。その頃から演出が少し変わっていて、着ぐるみがわざと舞台上で転び、それを見て子どもたちが笑う。なぜそんな演出をするのか、なぜ子どもをああやってくすぐるのか、なぜ中身で堂々と勝負ができないのか。以前はそうではありませんでしたから、私はおかしいと思う。そして、そんな演出は見たくない、だから行かないと答えました。すると担当者は困った顔で、自分たちも本当はああいうことはしたくないのだけれど、ああしてくすぐらなければ、親や子どもが来てくれない。商業演劇なので人が来てくれないと困るのだとおっしゃいました。マイナスのスパイラルです。その源にあるのがテレビのバラエティ番組で、若い人はあれに大きな影響を受けます。自虐的な人の話にみんなが笑い、それで笑いを取ろうとする。私はテレビを見ないのであまり偉そうなことは言えませんが、あれは何をやっているのかよく分かりません。

アンパンマンショーで子どもが舞台上に引きつけられて、我を忘れて踊って歌う。大人は盛り上げるのは上手です。演出一つでいくらでも変わります。舞台は時間で構成されていて、音と光で引っ張ります。大人の手にかかれば、子どもはまんまと引っかかります。しかし、そんなパフォーマンスを見せる子育てで、本当にいいのでしょうか。



## 9. 見えないものを見る能力

私は25年以上も、毎年夏に学生を連れてニュージーランドの公立校と学校交流をしています。ある年、校長から障がい者ばかりのミュージカルがあるから見に行こうと言われ、珍しいなと思って見に行きました。カレッジの体育館が舞台でした。重い障がいがある大人の方に、地元のボランティアの人が1人ずつ付いていました。例えば、ロミオ役の障がい者にもう1人付き添いが付いているというように、2人ずつで演じていました。15～20分ほどの短い「ロミオとジュリエット」で、舞台そのものは面白かったです。

驚いたのは、500名ほどが見に来ていましたが、みんな障がい者・障がい児なのです。前を向いても後ろを向いても騒いだりしていて、舞台が始まるまではこれでできるのかなと思っていました。ドキドキしながら、すごく不思議な感じでその中に座っていました。

彼らはマイクも何も使わずに、普通に幕の横で、誰々さんがこういうふうにおっしゃられたと、お世話になった人の名前を言います。それをみんなが聞いています。照明もカレッジの体育館なのでそんなに華やかなものではありませんし、音楽もテープかMD、CDでそんなに立派なものでもありません。ところが、すごいことに、舞台が始まると、会場に来ていた500名ほどの障がい者・障がい児が、一瞬で静かになったのです。日本ではあり得ないことなので、私はすごく感動しました。今までウェー、キャーと言っていたのに、本当に一瞬で静かになりました。そして、15～20分して舞台が終わると拍手をして、また叫び声を上げながら帰っていきました。

これはどうなっているのかと不思議で、授業後に教室を開放して障がい者の訓練をしているのをどうしても見たく行って行ったところ、障がい者が1対1で中年の年代の人たちと話していました。まだ単語一つうまく話せない、書けないような重い障がいのある人もいました。言葉が聞き取れない人もいて先生に間に入ってもらいました。私がある30代の若者と話したところ、彼の一つ目の願いは結婚をしたい、二つ目は免許証を取りたいということでした。訓練の後、彼はかなり重い障がいがあるのですが、1人で道を歩いて信号を渡って帰りました。知的機能に遅れがあっても、言葉は話せなくても、アルファベットが書けなくても、情緒がとても安定しているのです。これはすごいことです。しかも、周りから見ることや聞くことに関して割と的確なのです。それが定着

しにくいとか、理解しにくいとかいろいろな問題を抱えています。情緒ということに関していうとみんな一様に安定しているのです。ですから、500名集めても、きちんと一つのものを見ることができたのだと思います。

私たちもいろいろな子どもたちを見ます。情緒不安定とか、情緒障がい、自閉症児とか、いろいろな言い方をしますが、情緒は知的障がいとは関係がないようです。技術的に何もできない、うまく指が使えない、体がうまく使えないこととは別問題のようです。これはカルチャーショックを飛び越えて、ショックでした。

それから何十年も、私たちは一体子どもに何をしてきたのだろう、何をしてやらなければならないのだろうと考えています。人見知り、消極的、引っ込み思案は当たり前でしょう。母親にみんなしているからやってみなさいと言われてたとしても、嫌だと言わないで、情けない顔をして、母親にしがみついて、怖い顔でそれを見ているだけなんて、別の意味でこんなにいる子はいないでしょう。ではなぜ、この子はいい子なのか、われわれは母親に説明する責任があると思います。

今までこれが足りなかったのです。こうしなさい、ああしなさい、母親として、父親としてこうしろ、子どもというのはこういうもので、こういうふうに育てなさいと、人の言葉を押し付けていただけでした。なぜそうしなければいけないのか、なぜそこであいさつをしなければいけないのか、相手が納得できるような説明責任をする能力を、私たちはあまり磨いてきませんでした。当然のように人の言葉を押し付けるように話してばかりでした。

そのうち慣れるとか、みんなそうだとか平気で言いますが、それは子どもを本当に見下した、悲しい言い方です。慣れるのにも理由があるし、どんな気持ちで自分を収めたのか、収めなかったのか、1人の子どもの中にとっても複雑な葛藤があったはず。その結果、慣れたとしても、それだけを見ていたのでは駄目です。子ども理解は、何がその子に起きたのかということで、本当に大切なものが見えていないのです。そして、本当に大切なものは目に見えません。

それを見る力を持つのが、保育者の感性です。保育者の感性はどこに行ったのでしょうか。それを磨かなければなりません。子どもを通していろいろなものが見えてくるのがこの仕事の面白さです。だから仕事がつくても、給料が安くても、保育者の仕事は続いていたのです。



ここへ来てそれが続かなくなったのは、保育者の感性を育てる現場、そして、養成校、大学にも問題があるのだと思います。一人ひとりの学生や職員がプライドを持って現場の仕事をするために、何を伝えなければならないのか、何を勉強しなければならないのかを、誰も発信できていません。そのような状態からは、そろそろUターンしましょう。

## 10. 聞く力が育っていない子

スーパーマーケットで2歳ぐらいの子どもが、親を放って1人でどこへでも行ける。迷子になっても泣かない。公園で友達と取り合いをして相手を押して泣かせる。強い、たくましくと父親は喜ぶ。男の子はそれぐらいでなければと祖父も喜ぶ。こんなおかしな話はありません。親を放って自分でどこへでも行ける子は、そんなにたくましくて強い子なのですか。母親のそばがいいと離れない子どもは弱いのですか。全く違います。われわれは違う結果を知っているでしょう。それを親御さんに分かるように説明し、本来の子どものあるべき姿をきちんと教えるのが、われわれの責任なのです。

突っ走っている子どもは単に自我肥大を起こしていて、何でも思いどおりになると思っているだけです。2歳ぐらいまでは可愛くてたくましく見えますが、3歳半で困り始めて、4歳半で大きな落とし穴にはまります。クラスにそのような子がいたら、必ずその道をたどったと思います。

自分のしたいことをしていけないことはないのですが、一番学習しなければならないときに自分のしたいことだけをしていると、学習能力が落ちます。要するに、見ていない、聞いていないで、したいことだけをします。それがたくましく、強く見えてしまいます。学習能力が育っていなければ、定着していなければ、3歳半で3語音で話すところを話しません。「お母さん、あっちから黒い大きな犬が来た」と言うところを、見ていない、聞いていない、自分のしたいことだけして偏って育ってきた子どもは、「犬だ、大きい。犬だ、黒い」と言います。母親はまだ気づきません。

4歳になると、個人差はありますので一般的な年齢を言っていますが、人の気持ちができるようになります。人の気持ちを想像する力は言葉であって、映像ではありません。想像するというと絵面が浮かびますが、定着させるのは言葉です。自分の見たいもの、聞きたいものにこだわって学習していない子ども



は、言葉が入っておらず薄いです。言葉というと、言葉が遅いとか、2歳半なのにまだ話せないとか、発音とか、いろいろな問題がありますが、そんなことにこだわっていても実は何の意味もありません。勘違いしています。言葉は、聞いたものしか出てきません。つまり、聞いていなければ、能力はあっても話すことはできないのです。

自分で突っ走って周りから聞く機会が少ない子ども、自分がしたいことだけをしている子どもは、周りの情報に知らん顔をしているので入った言葉が薄く、言葉で理解することがとても苦手になります。先生が製作として、「鯉のぼりはこうして、こうやって、こうして、こうするのだよ」と教えると、「分かった」と早分かりするのですが、作業が続きません。大混乱を起こしてうまくいきません。それは子どもが悪いのではなく、聞く力が育っていないのです。

## 11. 見て聞いて学習している子ども

大阪で育って2年たつと、大阪の言葉を使って話しますが、大阪で生まれても、0歳で親御さんの転勤でドイツに行って2年間過ごす、基本的にドイツ語しか話せません。言葉というのは、聞いたものしか出てこないのです。何を聞かせたか、何を聞く機会を提供したかということです。暴走している自我肥大を起こしている子どもは、明るく元気でたくましく見えますが、物事を論理的に考える力が不足しているという大きな落とし穴が用意されています。そのベースになるのは、言葉の世界が薄いということです。経験が偏っているので、人間関係が広がろうとするときにつまづきます。相手の気持ちを想像する力、目に見えないものを想像する力、洞察する力が弱いのです。

そういう人は大人にもいて、そういう先生だと子どもは困ります。なかなか言っていることが伝わらず、「違うのに」という思いになります。先生も一生懸命子どもの言うことを聞いているのですが、いまいち通じなくて、子どもがイライラします。赤ちゃんの場合は、ずっとイライラして泣いています。

子どもは見て、聞いています。語りません。それは基本的な学習行動です。ですから、子どもが学習行動をたくさんできる場所を、大人が積極的につくってあげなければいけません。アンパンマンに行かない娘にイライラして、「あなたも行きなさい」と言うだけでは駄目です。例えば、「この子は2月生まれか。お兄ちゃんはこういうとき飛んでいったけれど、この子は2月生まれだか



ら、みんなと同じようにできないのか。少し遅いしね。仕方ないわ。ここにいてもいいわ」と、親が好意的に場所を提供して、ゆっくりと見る、聞く学習をする機会を多く与えられた子どもは、すこぶる賢くなる可能性があります。

私たちは、子どもの何を見ているのでしょうか。親御さんに分かりやすく子どもの通訳をするのが先生の仕事です。子どもとはこうなのだよということを、もっと発信しなければなりません。そろそろ若い親御さんに、「わがまま過ぎる。子どもを産んだら覚悟しなさい」と、言えるようになりたい。そのためには、先生も園も信用してもらわなければなりません。これまでは、園も園長も、もっともらしいことを言っても、「はいはい、分かっています」と聞いてくれませんでした。それを、「ああ、そうか。担任の先生は良いことを言うな。それはそうだ」「園長先生は良いことを言う。分かった、それはそうだ」と思ってくれて、それをやってみて、うまくいってこちらを見てもらえれば、しめたものです。どんどん発信していけます。

そういう説明責任を果たすための力を、すごく身近な問題で磨きたい。そして、若い親御さんにもっと聞きたい、もっと知りたい、うちの子はどうなっているのか教えてほしいと言ってきてほしいのです。園が安全・安心を売り物にして受け皿になるのではなく、向こうから中身をこうしてほしいと言ってきてほしい。そんなふうにUターンしたい。そのためには、一人ひとりの子どもの当たり前のことを、再度見直すことです。3,000回のあいさつは「いかがでしょう」と投げ掛けたい。では、どんなあいさつを教えるのか、みんなで考えたい。若い親御さんに考えてほしいのです。

## 12. 説明責任を磨く

今の若い方はきちんと言い分を言ってくれます。それはいい時代なのではないかと思います。大学で教えていると、たまに説教めいたことも言います。私が「小さい赤ちゃんを抱えている人を神戸の町で見かけたけど、お洒落な服に、高いヒールの靴を履いてパカパカ歩いていた。小さい子を連れて危ない。小さい子は歩けるようになって飛び出すから、いざというときに助けられない。子どもはどんな動きをするか分からない。やはり赤ちゃんを連れてるとき、子どもを連れてあるときの履物もいろいろ考えなければならない」と言うと、学生は「高いヒールも慣れたら走れますよ」と言い返します。私は「ああ、そうか。





では言うけど、小さい子が、せいぜい90cmのこの辺でチョロチョロ動いている。どうしても前屈みの形で子どもの介添えをすることが多い。腰パンか何か分かりませんが、これだけずらしてズボンを履いて、後ろから見たらパンツが丸見えでしょう。おかしいでしょう」と言います。学生は「見なければいいではないですか」と、なかなか負けていません。それでも、自然素材の化粧品だとしても、子どもはこの辺を触ったり舐めたりいろいろなこともします。髪の毛のくくり方一つにしても、子どもを持つということは、気をつけなければいけないのですよという話を続けてすることもあります。

しかし、学生もきちんと中身を言ってたどっていくときちんと聞くのです。こうしなさい、やめなさいが、一番反発するようです。それから、「これはどう思うか」と振ると、みんな目を白黒させて考えるのです。講演会や研修会でも、私は演壇を降りるようにしていますが、そうすると、みんな目を白黒させて緊張します。後のレポートに「質問するのはやめてください」「こちらへ来るのはやめてください」「ドキドキするからやめてください」と書いてあります。学生はどうやら、質問をすると正しい答えを探すようです。何か正しい答えを言わなければいけないと思って目を白黒させるのですが、私が聞いているのは自分の意見で、正しい答えは私の方が長く生きている分たくさん知っていると思います。私はあなたの意見を聞きたい。だから、正しい答えを探し回らずに落ち着いたなさいという話をしたことがあります。

日本では小中高、大学といつも正しい答えを求められてきましたから、自分の意見を言う習慣がなく、私たちも含めて、みんな苦しいのです。しかし、言わなければ駄目です。この壁を破らなければなりません。講演会で話を一方的に聞くだけでは駄目で、自分の意見を言うことがとても大事です。間違っているかは、みんなで考えればいいのです。自分の意見を言う、考える、いろいろな言葉を自分で生み出すきっかけになる講演会が、恐らくこれから説明責任を磨くという意味で大事です。情報が欲しいのであれば、本を読めばいいと思います。また、ネットの検索でもいくらでも出ています。考える力、自分の言葉を生み出す力を、ブラッシュアップさせなければなりません。

### 13. 保育園ごっこをしている間は

例えば、3歳児で、1人娘がいたとします。新学期に絶対泣くと思っていた



けれど泣きませんでした。順調にあって、親御さんは園が良かった、先生が良かったと、すごく喜んでます。家では保育園ごっこをします。父親、母親相手に、本を読めないのに絵本を持って、先生が読んでくれるよ、手遊びをしてもらっているよ、と本当に楽しそうにしています。親御さんは、こうやって過ごしているのだとよく分かります。先生のものまねもとても上手です。最初は心配していましたが本当に良かったと安心して、先生にそれを報告してくださいます。

ところが、皆さんも経験がありますよね。親が喜ぶほどはこの子はまだのびのびできていません。まだ、先生のそばから離れることができません。もちろん友達と遊ぶことができません。笑顔も少なく、1人で自分のことをするのも、少し自信がありません。お集まりとかをして、手遊びなどというときはちゃんとやります。しかし、「これができる人？」「はい」と1人で出てくることはまずありません。「やってみれば？」と言うと、「私はできない」と言います。先生は、自分から動き始めて楽しめるのにはもう少し時間がかかるのかなと見えています。

親御さんは大喜びですので、何となく先生は心が痛いです。「お宅のお子さんはまだ無理ですよ、先生のそばから離れませんよ、あまり笑っていませんよ、呼んでも出てきませんよ」と、本当のことを言った方がいいのでしょうか。親は喜んでるから、黙っていた方がいいのでしょうか。

（フロア1） 親からすれば、言ってもらった方がいいと思います。

（赤西） よし、では言ってやりましょう。「この子は本当は駄目です。喜んではいけません」そんな言い方はしなくてもいいですが、親はそれでは救われなと思います。うちの子は手がかかり過ぎたのか、私がちょっと可愛がり過ぎたか、私の育て方が悪かったのかと、反省し後ろ向きに考えます。なのでちょっと、本当のところは言いにくい。でも真実はごまかせない。それでは真実とは何かを考えましょう。

ここでのキーワードは、保育園ごっこです。保育園ごっこを家でやる子は、一様に意外と園ではのびのびしていないというところに秘密があります。親には、お子さんはまだこうだけれども、なぜという理由と、この先どうなるのか



につなげて説明したいです。

ごっこは、まだ本物ではないということです。お母さんごっこも本物ではないです。ごっこ遊びをするというのは、まだ本物にはなっていない、定着していない、練習中ということです。保育園ごっこは、普通は家でしかないのです。安心できる人の前で、失敗をしてもリラックスしてられるように、家の中でしかしません。しかも、いくら生き生きやっていたとしても、それはあくまで練習中です。本当に保育園が自分の中で定着したということとは、違うのです。ですから、園で子どもがのびのびしている姿には結びつきません。ここに落差が生まれます。

母親には、「褒めていただいてありがたいですが、実はこれはこういうことなのです。困っていることはないし、自分のこともきちんとできるのですが、まだのびのびと1人で遊んだり、友達を作ったりというところまでは届いていないのです」と言います。

そして、皆さん経験がありますよね。やがて、この子が、保育園でのびのびしてきた、自分のことを自分できちんとできる、友達とも笑い合えるようになった、先生のそばから離れて友達と遊ぶ、自分の遊びを見つけることができるようになった、本来の意味で保育園生活を楽しむことができるようになったのが、誰でも分かる方法があります。これは簡単です。そのことも母親に教えておきましょう。この子がどうなれば安心しますか。

(フロア2) 保育園であった嫌なことを家で言うようになる。

(赤西) 保育園であった嫌なことを家で言うようになった。なるほど。それでは、親がそこそこ安心してもいいですよというのは、この子がどんなふうに変われば、それは言えるのですか。どう思いますか。親が考える思考回路をつくらないといけません。親御さんにも分かることを言わなければなりません。私たちだけ分かっているでも仕方ないです。「では、先生、どうしたらいいのでしょうか」。親は心配して聞きます。答えを言っておきましょう。明日か明後日か、1週間後か、ひと月先かは分かりませんが、もう大丈夫、きちんとこの子は1人で頑張っているのだ、楽しんでいるのだということが分かる方法があります。それは簡単です。「家で保育園ごっこをしなくなること」です。



しかし、逆にしなくなれば、親は心配するのです。今まで保育園ごっこをやってくれて、よく分かっていたのに保育園ごっこを急にしなくなった。先生が何をしているのかわからない。何も言ってくれない。うちの子は、少し駄目なのではないかと、逆に心配します。われわれはそれをどう聞くのですか。目に見えるものに、大切なものはないのです。子どもの内面で何が起きているかを考えます。保育園ごっこをしている子が、保育園ごっこをしなくなれば、しめたものです。園でのびのびしだしたからです。その姿をずっと見ながら、きちんと整合性を持って、何が起きたかを親に説明します。親に分かる言葉を使うのです。

「家で保育園ごっこをして、先生のものまねまでして、座る位置まで決めて、絵本をひっくり返して見るということが出来る子どもは、見て聞く基本的な力は育っているということです。人見知りはあるかもしれませんが、きちんと学習していて、偉いのです。賢いです。しばらくすれば、保育園ごっこをしなくなるので待っておきましょう。そして、お家でそういうことが起きれば、教えてください。楽しみに待っておきましょう」ということまで話しましょう。

皆さんにも絶対に経験があると思います。ただ、こんなに小さなことを、きちんとつぶさに、前も後ろも、そして、それがどういうふうになったのかをつなげて、考え、検証したことがあまりありません。日常的に些細なこととして、子どもとはそういうものですよというくらい簡単に考えて、本当に私たちにとって大事なことを教えてくれていることに気づかないまま過ごしていたのです。ここをしつこくたどって、こだわっていくと、とても大事なものが見えてきます。

#### 14. めぐみのひとこと

去年2月に、私は寒くて部屋の中でお茶を飲んでいました。ある子どもが「おはよう」と入ってきたので、私は「おはよう」と言いました。子どもは私に何をしているのかを聞き、私はお茶を飲んでいると答えました。子どもはなぜかと聞くので、私は歳をとるとお茶が美味しいからと答えました。

次に、当時3歳のめぐみを通りました。彼女は1人娘で、いつも可愛くしてもらっています。私が「めぐみちゃん、おはよう」と声を掛けると、彼女は私に気がつき、ずっと私の方に歩いてきました。私は座っていますから、めぐみ



の目線とはほぼ同じ高さです。そして、お茶を持っている私の前まで来てひとこと、「下痢」と言いました。「へっ?」「今日だけおむつ」「はあ、大変だね」。すごいことを言います。私は他の先生に話そうとすると、その先生はもう親御さんに聞いて知っていました。私はお茶を持ったまま、確か朝は「おはようございます」のはずなのに「下痢」か。こんなことでいいのか、これは放っておいていいのかと考えます。

そして、夕方、先生たちを集めてそんな話をしました。私が話し出すと、みんなそのことを考えてくれます。床の上に座って、好きな格好をして、ときには作業の手を休めないで聞いたり、いろいろそんな話をします。朝は「おはようございます」なのに、めぐみはこんなことを言った。これはやはりきちんと指導しなければいけない、と話を投げます。そうすると、先生たちはいろいろ発言します。それを聞きながら、あいさつとは一体何なのか、その輪郭を共有します。とても大事な作業です。その大事な作業の出発点は、めぐみのひとことでした。

大学では、教授ですから、いろいろなことを教えます。理論的なことが多いのですが、そういう人たちが集まって話すときにいつも言うことがあります。「動物学者はボルネオの山の中で、毎朝オランウータンのふんを調べながら研究をして論文を書く。海洋学者はずっと海のそばで、ウミガメを見つけてはチェックしながら論文を書く。子どもの仕事、子どものことを話す私たちが、子どものそばにいないというのは変だよ。先生はこれだけいるけれども、保育室に飛び込んで、子どもたちに保育をすることができる先生が、この中に何人いるか。子どもに触れず、子どもの保育ができなくても、大学の教授はできる」そう言うと、先生たちは笑っています。私たちが大学で教えているのは保育の理論と実技です。それを1回90分で15コマ、ホームワークを含めて3時間、45時間で一つの科目を教えて、単位を提供します。単位を提供する力を持っているから、大学の教授というのは権威があります。

ところが、保育の理論も技術も最初からはありませんでした。最初にあったのは、めぐみのひとことです。それを物語と言うならば、物語は保育室の中にたくさんあって、それが集まって普遍的になり、一般化されたものが、理論なのです。しかし、皆さんが勉強してきたのは理論です。ですから、保育は変わりにくいのです。現場と理論が噛み合いません。



現場でこういったことの成り立ちを含めて学生たちに教える、実践を通して教える先生が少ないと思います。大学では、手遊びの仕方や制作の仕方、音楽、体育など、技術も教えます。技術論も大事ですが、われわれがプロとしての自覚やプライドを持ってすべきなのは、やはり子ども理解です。手遊びをやって、子どもたちを静かに集めることができても、目的が違います。手遊びも子ども理解です。手遊びを通して、前にいる子どもたちがどんな反応をして、どんな育ちをしているのか、それを見るのが目的でしょう。

## 15. 大事なものはなにか

先日、ある町の公立の保育所へ行ったときに、3歳児の20人ほどの部屋で先生がピアノで子どもに歌を教えていました。ピアノの音は大きいし、子どもの声も元気というより粗雑で大きすぎる感じでした。私は入って行って、歌っていいか聞きました。子どもたちには、おじさんが歌うから、君たちは歌わずに聞いていてとお願いしました。歌は歌って教えます。

ピアノを弾く先生には、もう少し小さい音で弾いてもらうようにお願いしました。大分音量を落としました。そして私は「虹が、虹が、空にかかって」と歌いながら子どもたちをじっと見ていました。子どもたちはおじさんが歌っていると、変に照れて、照れ笑いをする子がいたり、驚いて口がポカンと開いている子がいたり、隣の子とコソコソ話をしたりと、いろいろな子がいます。

歌い終わって、次は君たちの番だ、一緒に歌ってくれますかとお願いします。歌い始めたときに、先ほど1コーラス歌ったときに、集めた子どもの情報を生かしながら、歌を作り上げていきます。「虹が、虹が」「君はよかった。君の声はすごく素敵だね」とか、「君はこっち」などずっと手で合図をしながら、否定も肯定もしません。そして、1曲歌い終わると、歌は大きく変わります。3分でコロッと変わります。

しかし、そこにいる先生たちに伝わったことは、私が一人ひとりの子どもを見ながら、反応を確かめながら、一人ひとりに「君の声はきれいなものだから、もっと自信を持って歌って」とか「君は怒鳴っている声だ。もっと隣の子どもの声を聞かなければ」とか「君はもっと聞かなければ」とか、そっと教えていることではありませんでした。先生たちが反省会で言われたのは、「歌はもっと小さな声で歌っているのですね」ということでした。いいのですが、結果的に



そうなのですが、丁寧な指導が子どもを育てるのです。大切なものは目に見えないのです。結果として、小さなきれいな声できちんと歌えた。しかし小さく歌えばいいというわけではない。何が大事かを伝えるのは難しい問題だと思いつつ話をしておりました。

## 16. 大切なものは目に見えない

ここにいる私たちの子どもに関する経験の世界が一般化されて、普遍化されて、理論が生み出されてきました。ということは、答えは全て私たちが持っているということです。あいさつに戻りますが、「下痢」と言ってきた、めぐみの朝のあいさつは、「おはようございます」とは明らかに違います。では、「おはようございます」と言うことはいいことなのか、どんな意味があるのでしょうか。めぐみの「下痢」にはどんな意味があって、きちんとしたあいさつの指導が必要なのか、必要ないのでしょうか。要らないのならば、なぜ要らないのでしょうか。

朝、玄関に立っていると、みんな「おはようございます」と言って入ってきます。2歳ぐらいの子は、新学期に大きなお尻をしてトコトコ入ってきます。おじさんがあまり近づき過ぎるとおびえますから、少し離れて「おはよう」と言うと、私の顔を見て「ちょうちょ飛んでる」と言います。「えっ？ちょうちょ飛んでいるかな。ちょっと分からないな」と、私がキョロキョロしていると、今度は、「象さん見た」「えっ？」と、私はますます混乱します。しかし、私を放ったまま涼しい顔で園の中ですっと入っていきます。残された私は、ちょうちょが飛んでいるとか、象を見たとか悩んでしまいます。

きちんとしたあいさつを3,000回積み上げる立派な先生は、こんなことでは絶対に通しません。「ちょっと待ちなさい。朝はおはようございますと言います。象さん見た、ちょうちょ飛んでるととぼけてないで。はい、言い直しましょう」と言い直しをさせます。それを横で親御さんが見ると、「良い先生だ。私の子どもにあいさつを教えてくれている」と錯覚します。子どもは、こんな先生に本当のことは言えないとちょっとガッカリでしょう。何が違うのでしょうか。先生に悪気は全くありません。あいさつを教える先生はとても真面目です。しかし、子ども理解はできていません。噛み合っていないのです。このような、真面目なだけの先生は多いです。



特にひどいのは、親の方を向いて仕事をする先生です。夕方になると、普段子どもに「やめなさい」と偉そうに言いながら、お迎えが来ると急に変わって、「まさゆきちゃんのお母さんお迎えですよ。お帰りなさい、ご苦労さま」「まさゆきちゃん、ほらほら、来なさい」「よかったわね。お母さん、お迎えで」と言い、靴も履かせてくれます。「ほら、お母さんお迎えでよかったわね。明日も元気で来るのよ。はい、さようなら」と言います。母親は、私がいけない間も、この先生はうちの子どもをこうやって守って、教えて、助けて、育ててくれているのだ、本当に良い先生だと思います。

一方で、もっとあっさりした先生がいます。「ああ、お帰りなさい。まさゆきちゃん、お迎えですよ」と言います。まさゆきちゃんは靴をモタモタ履いています。特に夏は汗をかくのでかかとか入りません。それをじっと見ているだけで手伝いません。「自分でできるでしょう」と、それだけです。一生懸命履いています。かばんも手が届かないところだけ手伝いますが、自分でかけられるようになったのねと言うだけです。そして、さよならをします。母親は、何と冷たい先生でしょう。手伝ってくれない。あんな先生は駄目だと思うでしょう。とても優しい、丁寧に手伝ってくれる、面倒をみてくれるあの先生が、担任になってくれればいいのにと、親は思います。本当に大切なことは、目に見えないのです。

## 17. 正解は分からない

親を育てましょう。怒っては駄目です。説教をしては駄目です。私たちの仕事は、子どもが1人で生きていけるように育てることです。私たちの仕事は、寂しい仕事です。子どもは先生よりどんどん大きくなって、卒園していきます。後に残されるのが私たちの宿命です。この孤独にまず耐えられるようにならなければ、先生にはなれません。それは当たり前です。子どもが「先生、大好き」と寄ってきて「先生、本当にありがとう」と言う、なんて美しい世界でいいのだらうと思います。しかし、本当にすごい先生、本当に力がある先生を見たことがありますか。本当に力のある先生というのは、どんな先生を言うのでしょうか。

運動会で毎年リレーをやらうと大騒ぎします。リレーはチームでやります。中に、眼窩懸垂という、まぶたが落ちてきて前があまり見えなくなる先天性の





筋肉の病気で、両方とも落ちてきて見えにくくなって、体力もなくて細いゆきこちゃんという女の子がいます。知的障がいではありません。その子も入ってチームを組みます。やはり先生は考えて、少し足の速い子を並べます。そして、チームで練習します。練習しても練習しても勝てません。半周ぐらい違います。いろいろ練習して、大丈夫かなと思いつつながら、先生は何を思いつつ練習しているのだろうかと思いつつながらも、私はあまり口出しをせず任せています。

そして、運動会の前日、準備もして、今日は早めに帰ろうというときに、17時ぐらいに電話がかかってきました。1人の女の子の母親でした。その女の子はとても足が速い子です。その母親が言うには、娘に「明日のリレー頑張るなさいよ」と言ったところ、「どうせ私たちは頑張っても勝てない」と言ったそうです。母親は「どうして？ やって見なければ分からないよ。ゆきこちゃんも頑張っている。お母さんもよく知っている。本当に頑張って、努力していると思うよ。だから、明日の運動会でやってみなければ分からないでしょ」と言いましたが、娘は「お母さんは何も知らない。ゆきこがいるから、私たちは勝てないのだ」と言い切ります。

その園は、障がいの有無はみんなにオープンにしていますから、親御さんたちはみんな知っています。母親は思い余って「園の方針はよく分かっています。私もそれは正しいと思って受け入れています。どんな子どもであれ、やはり同じようにチャンスを与えてやることも意味があるし、みんながそれを守りながら努力する、とてもいいことだと思って受け入れています。ただ、自分の娘が5歳や6歳で、やってもみないのに全て諦めてしまっている。これはどうも、ちょっと親としては情けないです。そんな思いを子どもに味わわせていいのかわ、ちょっと悩みます。親の愚痴だと思って聞いてください」と電話してきたのです。苦情でも何でもなく、とても良い親です。よく分かる話です。

そこから3人の担任でその話を聞いて、みんな考え込みました。私たちの練習は一体どうだったのだろうかから始めて、ずっとたどって行って、子どもたちが本当に理解して、子どもたちは納得していたはずなのに、本当は私たちが押し付けていたのではなかったのだろうか、思いやりや優しさを売りつけていたのだろうか。そうであるならば、私たちはとんでもない勘違いをしていた。一人ひとりの子どもの気持ちは別の方向を向いていた。これでは先生失格でしょう等々、いろいろな意見が出ました。私はそのとき園長で、そのクラスだけで



はありませんから、20時、21時になったところに、明日があるので、「分かった。そうしたらこうしよう。今からゆきこの母親に電話して、明日、ゆきこは半周にしてもらおう。第2コーナーを回ってセンターのところから、第3、第4コーナーを回って半周にしよう。だから、その前の足の速い子は1周半走ってもらうことにして、ゆきこは半周走る。これは別に変なことでも何でもない。母親には今から電話して了解を取るから、今日はもう帰ろう。そうしようよ」と言いました。

すると1人の先生が立ち上がり、そのときの主任で、担当ですが、「私はゆきこに、『あなたはみんなより走るのが遅い。頑張らなければいけない。分かっているよね』と言ったら、ゆきこは『分かっている』と言った。『先生も一緒に頑張る。絶対に頑張る。最後まで諦めたら駄目、分かっているよね』と言ったら、ゆきこも『分かっている』と言った。ずっと励まし続けて、一緒にやって、ここまで来た。だから、明日、ゆきこにあなたは半周でいいとは絶対に言えない」と泣きながら怒って言いました。

そのときは本当にまずいことを言ったなと思いました。考えが足りなかった。苦し紛れとはいえ、自分は何ということを行ったのだろう。それはそうだ、当然だ。われわれはそのつもりでここまで来たはずだ。お前は何を修正案として出しているのだと、すごく反省しました。しかし、うまい方法はないし、時間も遅いし、今日は帰ろうと言って帰りました。

翌日、練習通りに、リレーも1周にして、そのチームはボロボロに負けました。その何年前から、手作りのメダルを先生が作っていました。その年のデザインで、優勝したチームはもらえることになっていました。それを渡すときになって、私は先生たちに、今日はメダルを渡せないと言いました。一人の先生は、ここまで来たのだから渡しましょうと言いました。先生たちの意見は分かれました。

表彰式で、みんなはメダルがもらえると思って、拍手しています。その前で「今日は優勝した子どもたちにメダルを渡すことはできません。理由は言えません」と言いました。メダルがもらえると思っていた女の子が1人泣きました。会場は800人ぐらい、また、いろいろな県からいろいろな先生が見に来られていたのですが、みんな一瞬シーンとしました。多くの方は、何かあるのではないかと好意的に聞いてくれましたが、泣き出した女の子の父親は、終わってから本



部テントに怒鳴りこんできました。「子どもの気持ちを大事にするとずっと言っているくせに、こんなに最後の最後で子どもを傷つけて平気なのか。おかしいだろう」と、散々叱られました。おっしゃるとおりです。子どもの気持ちを考えると偉そうなことを言って、子どもがもらえると思っているものを、今日は渡せないと取り上げたのですから。かわいそうなことをしました。ひたすら頭を下げるしかありませんでした。

運動会が終わって1週間後に、皆さんを集めて何が起きたのかの説明会をしました。しかし、理由は最後まで言いませんでした。「理由は個人的なことなので言えません。われわれの工夫が足りなかったと思います。とにかくあと5か月後に卒園ですから、最後まで責任を持って育てて学校へ送り出します」それしか今は言えません。親は大体のことは皆さん想像して分かってくださって、結局泣いた女の子も残って、卒園式も無事に終わって、卒園することができました。

しかし、今でも思います。一体どうすればよかったのでしょうか。先生たちは何かを間違えたのでしょうか。しかし、私が見ていても、無理もさせず、本当に上手な練習をしていました。でも、子どもの心には届いていなかった、少なくとも1人の子どもに届いていなかったというのは事実で、重いものが残りました。運動会の頃になると、いつもそのことが頭によぎります。毎年ハンディキャップの子はいますが、それでもリレーはやめません。逃げることはしませんが、いつも宿題は残ります。

## 18. 良い先生とは

力のある先生というと、感性豊かな先生、子どものことを考える先生など、いろいろありますが、「明日、今さらこの子に半周とは、私は絶対に言えない」と言った先生のすごいところは、そこで踏ん張って、泣きながら怒ったことです。私は頭を殴られたような気分でした。その先生が良い先生かどうかは別として、そこで踏ん張れるというのはすごいと思いました。

良い先生は私の周りにも何人かいますが、見ていると、普段は言いませんし、もう大人なのであえて打ち明けませんが、どこか心の中に一つや二つ傷を持っています。うまくコミュニケーションができなかったり、いろいろなことがあったり、自分の中にこっそり隠している傷を持っていると思います。むしろそう



いったものをきちんと抱え込んで、それをきちんと共有できるような仲間がいて、その中で良い先生たちは育っていくものなのではないかと思ったことがあります。

われわれの仕事は、最後の最後は職人芸です。テキストでは良い先生にはなれません。良い先輩の仕事を見て覚えていく。例えば、良い大工さんの仕事を見るから、良い家を造ることができるのです。先輩の子どもの触り方、指導の仕方、導き方、親に対する接し方を含めて、いろいろなことを横で見ながら学ぶことが、とても大事です。最後の最後はそれが勝負です。良い先生を目指しましょう。では、良い先生というのは何なのでしょう。またここへグルグルと戻るわけです。

## 19. まとめ

今日、私が伝えたいのは、子どもに興味を持ってほしいということ、そして、目に見えぬものがあるということです。

「カスピアン王子のつのおえ」というナルニア国物語の映画で、一番下の妹がアスランを探して、お兄さんたちと山の中で旅をするときに言いました。「ああ、あそこにアスランがいる」。指差した方をお兄さんとお姉さんが振り返って見ても、そこには誰もいません。そして、お兄さんが怒ります。「あんなところにいるわけがないではないか。誰もいないではないか。アスランはあんなところにはいないのだ」と怒ります。そして、山道を登っていきます。末の妹は、後をトボトボと付いていきながら、ひとりごとを言います。「お兄ちゃんたちは見ようとしなから見えないのよ。あそこにいたもの」。映画の最後に分かりますが、あそこにやはりいたのです。見ようとしなければ見えません。本当に大切なものは目に見えないものです。

先生たちには、頭を柔らかくして、心を柔らかくして、自分の物語を大切にしたいと思えます。そして、何人かが集まってそれを一般化して、普遍化して、自分たちの胸に納めて、親御さんにきちんと伝える言葉を生み出して、親にこちらを向いていただく。結果的に安全・安心を売り物にするだけではない保育を届けていただきたいと思えます。最初から持ちだしても無理です。親御さんは悪くない、子どもは悪くない。子どもはつくられるのです。私たち大人の世代が責任を自覚して、真新しい制度に向き合って、一からやろうという



ふうになるといいと思います。

時間になりましたのでこれで終わります。ありがとうございました。

(拍手)